CCさくら ～パラレル～

琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＣさくら　～パラレル～

【Ｎコード】
Ｎ２６３５Ｍ

【作者名】
琥珀

【あらすじ】
木之本さくらと李小狼は、魔法が使える中学二年生。
ある日、とある事情によって、出会った二人。
二人は、だんだんと惹かれ合っていった…。

※カードキャプターさくらのパラレルです。
二人共、魔法も使えます。
原作が小狼→さくらだたので、さくら→小狼寄りにしたいと思って

います。

【あらすじ変更いたしました。m（＿＿）m】

第一話　「出会い」～さくらｓｉｄｅ～

「はあ…っはあ…っ！」

わたし、木之本さくら！
中学2年生のごくごく普通の女の子です！
あ、ちょっと人と違うところといえば…。
『クロウカード』っていうカードを使って、魔法が使えるって事ぐらいかな？
（詳しくは後で説明するね）
只今寝坊して、バス停にダッシュしてます！

ぷしゅ～
「ま、間に合ったぁ～」

なんとかバスに間に合った。
良かったぁ～！

「ん？」

わたしの前に見た事の無い男の子が、本を読みながら立っていた。
きれいな茶色の髪の男の子。
茶色の髪って珍しいよね。
あの背の高さだと、三年生かな？
あのブレザーは、友枝中じゃない。
多分、星條中学校。
つり革に捕まっているけど、危ないと思う。

「あ、あのっ…！」

「え？」

あ！つ、つい声かけちゃった！
えっとえっと…、どうしよう！

「あの…何か？」

男の子が不思議そうに聞いてくる
あーもう！わたしのバカ！
もうどうにでもなって！

「あの…ほ、本、読みながらだと、あ、危ない…ですよ？」

とりあえず、笑顔で言ったけど…。
ひきつっちゃった気がする…。

「あ、悪い…じゃなくて、すいません」

男の子はぺこりと頭を下げてきた。
そして、しおりを挟んで、パタリと本を閉じる。
ブックカバーがしてあって、なんの本かは分かんないや…。
でも、なんだか、すごく真剣に読んでたから、難しい本なのかも。
と、とりあえず、何か言わなくちゃ！

「そ、その制服だと、星条ですよね！三年生ですか？」

わたしがそう聞くと、男の子はびっくりしたみたい。
何回か瞬きをした。
そして、

「いや、二年生だ」
って言ったの。
そうそう二年生…。

「――って、二年生なの！？」
「あ、ああ…」
男の子はまたびっくりしたみたい。
はぅ～。
絶対三年生だと思ってたよ～。
同い年だったのね…。

「えっと…一年か？」
ガーン！！
わたし、一年生に見えるの！？
「わ、わたしも二年生なの…」
わたしは苦笑しながら言った。
「え！？同い年だったのか！？　わ、悪い！おれはてっきり…！」
男の子は慌ててペコペコと頭を下げる。
なんだか、失礼だけど、かわいい♪

『次は―星條中学校前入口―
ご用の方はこちらでお下り下さい』

「あ、次だ」
「あっ…」

もう少しお話してたかったなぁ…。

ぷしゅ～
バスの扉が開く。

「じゃあ」
男の子はそう言って、バスを降りちゃった。

「あ…。名前…。聞けば良かったなぁ…」

うぅ…後悔…。
でも、楽しかったなあ…。
また会えるといいなぁ…。
わたしは、バスに揺られながら、
そう、思っていた――――

第一話　「出会い」～さくらｓｉｄｅ～（後書き）

はじめまして。琥珀ですｍ（　）ｍ
どうだったでしょうか？
まだまだ駄目文ですが、感想お待ちしています。

第一話　「出会い」～小狼ｓｉｄｅ～

おれは、李小狼。
中学2年生のごくごく普通の…とは、言えないな…。
いろんな意味で…。
例えば、香港からの留学生だったり、実家がいろいろやっていたり…。
でも、一番違うのは魔法が使えるって事だな…。
（詳しくは後で説明する。留学の理由もな）

ぷしゅ～
「ま、間に合ったぁ～」

おれがバスの中で、本を読んでいると、一人の女生徒が急いで乗り込んで来たみたいだった。
でも、おれには関係無かったし、第一、本に集中していて気付かなかった。
本がもう少しで中盤にいこうとした時、

「あ、あのっ…！」

と言って、さっきの女生徒が話し掛けてきた。
蜂蜜色の髪で、ショートヘア。
この背の高さだと、一年生か？
この制服は、星條中じゃないな。
どこの学校かは…分からない。
引っ越して来たばかりだからな。

「え？」

とりあえず、おれはやっと女生徒に気付いた。
すると、なんだか女生徒は焦っているように見えた。
えーと…。
こうゆう場合、どうすれば良いんだ？

「あの…何か？」

とりあえず、そうやって聞いてみる。
なぜ話しかけられたのかが、不思議だった。
すると、女生徒の目が不安定に泳いだ。
と思ったら、

「あの…ほ、本、読みながらだと、あ、危ない…ですよ？」

と、ひきつった笑顔で言って来た。
そういえばバスの中だったなここ…。

「あ、悪い…」

と、ついタメ語で話しそうになって、慌てて

「じゃなくて、すいません」

と言い直し頭を下げた。
そして、しおりを挟んで、パタリと本を閉じる。
…本当はもう少し読みたかったが…。
まあ、確かに危ないしな。
そんな風に考えていると、

「そ、その制服だと、星條ですよね！三年生ですか？」
と聞いてきた。
あまりにいきなりだったため、びっくりした。
だから何回か瞬きをしたが…。
そこで、質問された事に気付き、
「いや、二年生だ」
と答えた
すると女生徒は笑ったまま固まって…。
ど、どうしたんだ？
そう思ったが、
「――って、二年生なの！？」
と言ってきた。
あまりにも大きな声だったため、
「あ、ああ…」
と、微妙な答えを返してしまった。
そんなに意外か？
で、とりあえず、話を繋げようと、
「えっと…一年か？」
と言うと、女生徒はまた固まった。

なんだかショックを受けているように見える…。
な、何かしてしまったのだろうか…。
すると、
「わ、わたしも二年生なの…」
と、苦笑しながら言ってきた。

…え？
今、二年生って…

「え！？同い年だったのか！？　わ、悪い！おれはてっきり…！」
おれは慌てて何度も頭を下げる。
まさか、二年生に一年生と言ってしまうなんて…！
すごい、失礼な事だ…。
…？
でも、女生徒は楽しそうにクスクスと笑っている。
どうしてだ？
やっぱり女ってよく分からない…。

『次は―星條中学校前入口―
ご用の方はこちらでお下り下さい』

「あ、次だ」
「あっ…」

女生徒は残念そうな声をもらした。

どうしてだ？
やっぱりよく分からない…。

ぷしゅ～
バスの扉が開く

「じゃあ」

おれはそう言って、バスを降りた。

「あ…。名前…、聞くの忘れた…」

…聞けば良かった。
って！何考えているんだおれ！
どうしたんだ！
…でも、出来るならまた…。
って！だからどうした！おれ！
おれは顔が熱くなって、頭をぶんぶんと横に振った――――

第二話　「朝」～さくらｓｉｄｅ～

「おっはよー！」

はふ～。
間に合った～。
なんとか予鈴前に着いたよ～。

「おはようございます。さくらちゃん」
「あっ！知世ちゃん、おっはよ♪」

この子は大道寺知世ちゃん！
わたしのいっちばんのお友達！
なんでもよく気が付いて、美人で優しくて、すっごくいい子なんだけど、
ちょぉぉぉっと変わってるんだよね…。

「さくらちゃん、今日も超絶かわいいですわー！」
「ほ、ほえええ」
「そうですわ！私、新しいビデオを買いましたの！今度是非！撮影させて下さいね！」
「う、うん…。で、でも、わたしよりもっと面白い物撮ったほうが良くない？」
「さくらちゃん以上に可愛くて面白いものなんて、ありませんわー！」

はにゃ～。
知世ちゃ～～～ん！！
お願いだから戻って来て～～～！

…知世ちゃんはビデオとか写真を撮るのが趣味で、わたしのこともいっぱい撮ってくれるの。
でもでも、恥ずかしいよぅ〜〜〜〜！！

「そういえばさくらちゃん、ご機嫌ですわね」
「え、そ、そう？」
「はい」

知世ちゃんにっこり笑ってる。
ほえぇ〜〜。
やっぱり分かっちゃうのかなぁ？

「さくらちゃんが朝からご機嫌ということは…」
「ほえ？」
「月城さん関係ですわね？」

ほっほえええ！！！／／／／
雪兎さん！？
たっ確かに雪兎さんのことは、す、好きだけど、
でもでもっ！

「今日は違うのっ！」

わたし、思いっきり首振っちゃった。
変に思ったかな？

「月城さんじゃ無いんですの？」
「う、うん」
「では…？」
「えっえっとね。今日ね、バスがね、楽しかったの」

「まぁ、何かおありでしたの？」
「う、うん、ちょっとね」
「どんなことがおありでしたの？」

ほええぇぇ〜〜！
知世ちゃん、目が輝いてるよ〜。
どんな想像してるのかなぁ。

「え、えっとね。この辺では見かけない、茶色の髪の男の子に会ったの」
「まぁ…、不良さんですの？」

ほえ？不良さん？
あ、茶色の髪って言ったからかな。
たしかに、そうだよね。
でも、あの子は…、

「分かんない…。でも、絶対不良さんじゃないと思うの。
すっごく真面目そうだったし、本読んでたし、それに…」

それに…

――――――――――――

――――――――――――――――――――

「わ、わたしも二年生なの…」

「え！？同い年だったのか！？　わ、悪い！おれはてっきり…！」

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――

それに…、
すっごく…、

「すっごく優しそうだったから！」
「そうなんですの」

知世ちゃんは安心したような、そんな感じですっごく優しく笑ったの。
心配かけちゃったかな？

「そのお方も友枝中なんですか？」
「ううん。星條だった」
「そうなんですの…。残念ですわね」
「うん…。名前を聞けばよかったよ…」
「聞いてないんですか？」
「う、うん…。」

はぅ…。
なんだかまた後悔…。

「さくらちゃん」
「ほえ？」
「その人のこと、お好きなんですの？」

……え？

知世ちゃん、いま…。

「ほっほえええええええええ！！？？」

すっすすすすすすすす好き！！？？

「ちっ違うよ！まだ一回しか会ってないし！　ただ…お友達になりたいなー…って！」

はうううぅ…。

わたし、多分顔真っ赤。

すっごく熱いんだもん。

「さくらちゃん、どうしたの？大声出して」

「ほえっ！千春ちゃん！なんでもないよ！あ、ははは」

「でも、顔が赤いわ」

「りっ利佳ちゃん！」

「ほんとだ～」

「な、奈緒子ちゃん！！ほ、ほんとに何でもないよ～」

はぅ～。

恥ずかしいよ～！

もぅ、なんで、こんなに恥ずかしいのかな…。

もー、分かんない！

第二話　「朝」～小狼ｓｉｄｅ～

「ねーねー！あんな子いたっけ？」
「知らなーい！」
「転校生かぁ？」
「目立ってるねー」

な、なんか色々言われてるな…。
この髪のせいか？
そんなに目立たないって思ってたんだが…。
早く職員室に行ってしまおう。

「えっと職員室は…」
確かこっちだったよな。
…あ、あった。

「ふぅ」

転校手続きで何回か来たから迷わずこれたな、職員室。
…と、突っ立っていてもしょうがないな。

ガラッ

「失礼します」

ドアをあけると思った程先生はいなかった。
えっと…どの先生に…。
うーん……。

「もしかして、李君かな？」
「あ、はい！」
おれがキョロキョロしていると、一人の女の先生がやってきた。
もしかして、あの人が担任か？
「えっと、李小狼です」
とりあえず、一礼くらいはしないと駄目だよな。
「私は貴方の担任の観月歌穂よ。」
…！？
この先生…！
すごい力の持ち主だ…！
油断出来ない…！
「あなたのクラスは二年B組よ。行きましょう」
「…はい」
この先生…何者だ？
…今は付いて行くしかないけど。
そういえば、B組ってどんなクラスだ？
「ここよ。ちょっと待っててね」
「…はい」
先生は教室に入っていった。
中からざわざわと生徒の声が聞こえる。
…まさか、うるさいクラスなのか？

あ、入っていいみたいだな。
うーん…。
柄にも無く少し緊張してるかもしれない…。

ガラッ

う、皆見てるな…。
いやいや、ここでしっかりしないと！

「李小狼君。香港から転校してきたの。じゃ、挨拶して？」
「香港から転校してきました。李小狼です。
小さい頃から日本には興味があって勉強してたので言葉は分かります。
でも細かいことは分からないので迷惑をかけてしまうかも知れませんが、よろしくお願いします。」

な、なんとか言えたな。
…ん？
な、なんかいろいろ言われてる気がするな…。
まぁ、転校生だしな、そんなものなんだろ。

「李君の席はあそこよ。山崎君、手をあげて？」
「はーい、ここだよー」
「あの子の隣よ」
「あ、はい」

目の細い奴がこっちに手を振ってくる。
あいつの隣か。
…しかし、あんなに目が細くて…、というか、閉じてて、前見えるのか？

まぁ、見えるんだよ…な。
そう思うことにしよう。

「よろしく」
「うん、よろしくねー。僕、山崎貴史っていうんだ」
「そうか。」
「僕、これでも学級委員なんだ。なんでも聞いてね」
「ありがとう」

へぇ、学級委員だったのか。
真面目な奴なのかもしれないな。

「李君」
「なんだ？」
「今日、友枝中の友達と約束があるんだよ。　でさ、新しい友達だって紹介したいし、一緒に来ないかい？」
「え？迷惑じゃないか？」
「みんな優しいから平気だよー。少しおっかない子もいるけどねー」

おっかない、なんていってるけど、怖がってる感じじゃないじゃないか。
むしろ、楽しそうな気が…。

「じ、じゃあ…」
「決まりだね」

折角誘ってくれたんだし、な。
そういえば、さっき会った奴…、もしかして友枝か？
そんなに中学があるなんて思えないし…。
……ん！！？？なんでこんな事を考えているんだおれは！！

なんなんだ！！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2635m/

CCさくら ～パラレル～

2011年1月20日20時40分発行